

広島俳句倶楽部

令和五年一月作品集

京都

ちどり

秋に大学を卒業した娘が広島に帰ることになり、京都に引越しの手伝いに行きました。その合間に、名残惜しむように最後の京都観光をしました。娘が京都にいる間、様々な場所を巡り、すっかり京都が好きになりました。

実南天京都に居る子卒業す

ワゴン車で京都へ走る紅葉山

紅葉の大文字山見上げけり

風や家族で渡る渡月橋

岩沖の群鶏を見る十二月

機織の音聞こえたり冬の朝

子と夫と荷造りをする室の花

古蒲団に互ひ違ひに眠りをり

冬日差す子の部屋すつかり片付いて

山茶花や荷を積み車出発す

《作品鑑賞》

森口良樹

京都という歴史の町を背景に、お子さんの卒業を祝う、ちどりさんや旦那さんの暖かいまなざしを深く感じ、句を読ませていただきました。

子と夫と荷造りをする室の花

ちどりさん夫婦の、愛する娘さんの様子が垣間見え、室の花が大学生活の終焉を惜しんでいるように受け取れました。

機織の音聞こえたり冬の朝

西陣織の機織を思わせて頂きました。伝統技術の伝承の様は冬の朝も手が悴みながら絶えず続けられるのでしょうか。なぜか、冬の朝の季語に生地を晒す様子まで見えてしまいました。

古蒲団に互ひ違ひに眠りをり

ある程度部屋が片付いているのでしょうか。娘さんの住み慣れた下宿先に一家が寄り添いきっと、深い眠りにつかれたのでしょうか。

石川晩秋の旅

井藤希

秋の終りに、妻と犬と一緒に車の旅に出た。行先は金沢で、ここを拠点に四、五日能登などを観て回った。金沢は二十数年前に三年間暮らした町で、その後も何度か訪れているのだが、今回のこの季節はひどく懐かしい思いがした。能登では、初めて千枚田に行った。この田の一枚一枚は、本当に小さなものなのだが、先人達が拓き耕してきた姿を現在の景色に観ることができて、誠に素晴らしいものである。既に冬に入る季節ではあったが、金沢の懐かしい場所にも、能登の初めての風景にも、心に暖かさが残る、そんな旅となった。

新蕎麦を食うて琵琶湖を離れたる

犬乗せて峠を越ゆる暮の秋

霧晴れて白山空に満ちてをり

秋灯や連れ立つ路地に覚えある

奥能登を臨む峠や雪螢

禅寺の僧に会釈す落葉時

鳴き砂の沈黙したる冬の浜

風やせめて棚田に夕日来よ

寒雷は能登の海より鳴り出しぬ

旅のはや終はりて能登の山眠る

《作品鑑賞》

村上正人

「石川晩秋の旅」の作者である井藤希さんは、句会では納得するまで佐保先生に質問する、向上心旺盛な方だ。

この作品では、二十数年前に三年間暮らした金沢を、奥様そして愛犬と一緒に車で旅され、晩秋の金沢の情景と能登での初めての景色などを読み手に印象深く伝わる特別作品にまとめられた。

霧晴れて白山空に満ちてをり

霧が晴れた先に白山の雄大な姿が現れる。「空に満ち」という表現が白山を表す他のどのような表現をも凌いでいるように思われる。

風やせめて棚田に夕日来よ

能登の千枚田に先人達の労苦を感じる折、冬の訪れを思わせる風ではなく、せめて夕日だけでも出て、田を照らす景が見てみたい。そのような作者の願いが伝わる作品である。

寒雷は能登の海より鳴り出しぬ

冬の雷は夏の雷の十分の一ほどの高さの低い雷雲で発生し、同じ場所で連続して発生することから危険な雷といわれる。冬の能登沖に垂れ込めた雲や海の色までもが想像でき、不気味さも伝わってくる作品である。

佐保光俊

日の昇る吉備を見てゐる初電車
青空を鶯の流るる三日かな

村上正人

初星の天の端まで満ちてをる
初夢で逢うたる友に電話せり

高尾ひとみ

左義長へ一人一人と畦を踏む
淑気かな橋の上の空大いなる

あざみ

長らふる命に初日仰ぎたる
朱の色に島々染めて初日かな

亜矢

元日の日の当りたる母の背ナ
習ひ事行く子見送る四日かな

綾乃

初鏡子を言い訳にせぬと決め
亡き人の口癖思ふ初湯かな

井藤希

赤ん坊の畳に這うてお元日
初旅や肩に鞆を掛けてゆく

栄吉

初夢やミニスカートの妻が居る
這ひ回る子を抱き上げて初写真

大畑恵

初日の出向うのビルに昇りけり
鎮守社に家族で並ぶ初詣

暁子

産土に少し風ある年の朝
磴道の歩み遅々たる初詣

すみれ

年新た大きく息吸ひ背を伸ばす
覆ひたる雪の白さの淑気かな

知佳子

見も知らぬ人と柏手初日の出
初風の海を車窓に里帰り

ちどり

初日の出母の家から拝みけり
正月の風午後からも揚げに行く

辻純江

初日待つ人並びたる橋の上
昼月の淡き影ある淑気かな

友岡紫山子

ハート描く絵馬見つけたり初詣
数歩だけ道を譲れる初鵲

ふじ女

新年の玄関生け花の震え

新しき続きにしおり今朝の春

松田裕子

今日帰る吾子と海見る淑気かな

全快の友と出掛くる七日かな

雲雀

去年今年仏壇の火の燃えてをり

おみくじを結ぶ手の皺初詣

村上理江

志綴りて用づる初日記

読初や光源氏に見えんと

森口良樹

恋運を見せ合うてをり初御籤

公務員ネクタイ迷ふ四日かな

金川昭子

外人の祈る姿や初詣

上島康子

飼ひ鳥の声で目覚めて年新た

紀英子

元旦の御堂の灯り消し終へし

熊谷ゆり子

酔顔も赤子も揃ひ初詣

桑門わかこ

元日の日のやはらかに昼寝せり

須美れい

日の丸の旗出す役目お元日

高嶋彌代

旅先の上杉神社へ初詣

高梨英子

女正月おはこ料理を持ち寄りて

中野明美

新年の朝日に光る南天かな

撫子

背伸びして橋より拝む初日かな

みさ子

七草を口ずさみつ刻みけり

美耶

初詣無人の宮に鈴鳴らし

やす保

初春のきらめく流れ海に入る

山野ウタ

満天の星を見てをり去年今年

備中のこの木にいつも鴈の来る

冬の霧薄れてきたる大路かな

一面の刈田となりぬ神の前

枯山に日の差し込める大路かな

明らかに国府あたりは今雪ぞ

雪払ひつつ国府への大路ゆく

山茶花の道は古墳で行き止まり

古墳から古墳へ枯葉踏みゆけり

その枝の落ち葉激しき大榎

墓へ行く道の落葉は掃かれたり

佐保光俊

鳥たちの飛び来る庭や石路咲いて

黒き蛇群れて盛んな花八つ手

枯木立走つてゆける二人かな

門燈の消えて静かな寒の月

初雪や流星群を待つ夜に

初雪の山腹を日の差し始む

寄生木に雪の積もりて大榎

煤払若き世話役よく動き

焼藪を二人で割つて食ひにけり

七種粥今年は吾が作りたる

村上正人

耐鶺まだ来ぬこの木紅葉して

花石路のせせらぎをまた訪うてをり

目白かな小さき花の蜜を吸ひ

鳩鳴いて濠に及べる日差かな

山頂に向かひて冬の空青し

冬晴を思ふがままに鶺の鳴き

冬風やはるか島まで海光り

冬の海しづかな波に鳥の揺れ

灌木に飛び込む冬の雀かな

近江にも雪の降るらむ句集読む

島尾ひとみ

瀬戸内に潮まんまんと初苗

製油所の炎猛るや大旦

床の間に子の勲章と鏡餅

若菜野へスキップの子を先頭に

風揚げの足跡を波攫ひけり

左義長の火の粉をかぶる消防士

最終の船笛長し雪しまく

鳥の来て雪解氷飲む朝かな

膝ついて小流れに摘む根白草

味噌汁にはのかに香り露の臺

酒蔵の井戸水を汲む小春かな

鮮やかな赤きマカロン小六月

冬休み鍋のカラメル匂ひ立つ

それぞれの石に鳥くる冬の川

冬至の夜子と聞きに行くヴィヴァルディ

コンサートホール後方暖ひとつ

カフェオレに膜の張りたる雪の朝

熱の子の顔見て眠る冬の月

病院の赤き灯りや霜の夜

子の弾けるソナタの「悲愴」寒の入

冠雪に富士の青さの定まりぬ

生け垣の山茶花に触れくづれたり

黄昏の渋滞に見る冬櫓

献血の人の膝掛並びたり

年の瀬や灯火の消えぬ警察署

齒朶飾る祖父の背中を見てゐたり

青天の杜へ向かふ初詣

柏手の夫清々し初詣

年明けの稽古場に入る生徒かな

療養の君の身となれ寒卵

あざみ

亜矢

綾乃

もみぢ葉の落ちて水面の静かなり
前庭に咲き始めたり冬の薔薇
南座の看板灯る冬至かな
年の市古着の帯を値切りたる
年の夜や皆の揃ひて静かなる
電線の雀温める初日かな
葉牡丹を眺めて心穏やかに
冬雲の隙間夕日の眩しくて
冬鷺の汀の二羽の相寄らず
山鳩のうまく飛び入る枯木立

井藤希

懐かしき故郷の名の蜜柑着く
寒夜覚め母の寢息を確かむる
月冴ゆる一面の雲押し退けて
新しきバイクを選び年を越す
コンビニの人影の消え霜夜来る
湯冷めして掛け算九九を唱へをり
冬の雨読みたき本の名を記す
直筆に見覚えのあり寒見舞
噓して犬の散歩に出かけたり
鴨群れて散歩仲間の集まり来

栄吉

土起こし秋球根を植ゑにけり
山茶花の街路樹のある町をゆく
臘梅の枝にまだ花残りたる
臘梅を透かして雨の降りにけり
冬椿一つ二つと咲き始む
寒椿わが背を越えて咲きにけり
水仙が一輪庭に咲きにけり
大寒の少し明るき帰宅かな
出勤の遠くの山に雪の降る
露の曇小さき頭擡げをり

大畑恵

美容院令せ鏡に室の花

ありつたけ寝具干したる年用意

大年の蒼天にあり昼の月

鳩時計階下に鳴つて初昔

すれ違ふ少女の会釈年の朝

米撒いて雀呼びたる寒九かな

かにかくに喋り止まらぬ女正月

行人の足止めてゆく焚火かな

遅き湯の窓を打ちたる寒の雨

早梅の日向日向と歩きけり

暁子

車椅子こばみディナーのクリスマス

下山後の彼と熱燗酌み交す

年新た句集近江を読み返し

はや二日日差しに座して句集読む

長押には母のちぎり絵里冴えて

山荘の車寄せから除雪せり

雪の原転んでもすぐ立ち行く子

同級生寒卵持ち立ち寄りぬ

臘梅を手に厨へと夫の来る

ダンボール切り貼りする子日脚伸び

すみれ

まだ知らぬ道のありけり冬ぬくし

飛んでよし泳いでよし鴨の群

山茶花の廻りを残し掃いてあり

休みつつ降るる石段冬日和

初雪を見上ぐる我に雪の降る

少年の降るに任せて雪を受く

艦船に人影見ゆる寒の入

鳥去つて裸木に日のありにけり

白いのが咲いてるよと探梅行

次に来る時には母と梅の宿

知佳子

母が家の周りを覆ふ霜の花

母が家に満天の星冴ゆるなり

藤娘買ひくれし姉羽子板市

九十の母が刺子の縫始

幼子と炬燵の上で独樂廻し

玄関の大壺に臘梅を入れ

寒灸母の背中に据ゑにけり

霜柱踏んで畑へ野菜採り

手を翳し四方山話する焚火

お隣と焚火を囲み話したり

ちどり

実ばかりの櫓に空の青さかな

太刀魚の刃物のごとく売られをり

シーサーの乗りたる屋根や年新た

携帯で写して初日送信す

三世代揃ひ雑煮で祝ひけり

雪催ひ赤き漆の椀を拭く

小正月インシュリン針腹に刺す

大寒や日あたりながら雪降り来

屋根に雪載せる車や街の朝

風花や顔見ずに猫通り過ぎ

辻純江

冬菊の香りほのかに角の家

落ちてなほ生き生きとして冬椿

臘梅の日に溶けるかに影もなし

淑やかなロビーに琴の流れをり

金柑の甘さとろりと女正月

青空を突き刺すごとし冬木立

伐採の卯の枝に冬木の芽

寒月の映つてゐたる手水鉢

雪降りフルト磨く夫と居て

道祖神供へし如く椿落ち

友岡崇山子

夜学の子帰るを待つて鍋に火を

隣人の大声出して大根干す

年用意全て終へたり戸を閉むる

名を書いて御節に係ふる箸袋

朱の鳥居眩しく見たる初詣

病得し友の太き字筆始め

巻く紐に氣を引き締めて独樂廻す

励まされ息弾ませて雪の山

退職の庭に臘梅咲きにけり

散歩道桜の蕾見つけたる

雲雀

甘辛の皿を並べて餅を揚ぐ

餅揚のくるんと回るを待つている

揚き立ての餅中心に頭寄る

バックにはスマホも入れて餅配

艶やかに覗く栗あり栗きんとん

朱の皿の黒豆黒曜石に似て

どんぶりに高校生の雑煮かな

二日にはマーマレードの上等を

春隣壁一面のメニューかな

炬燵にて大きなむすび皆が食う

ふじ女

極月の父の寢息と喉仏

窓際の冬日に眠る十姉妹

煌々とあかりの灯る除夜の寺

千支の子が最初に撞いて除夜の鐘

除夜の鐘撞いて遅めの蕎麦を食ふ

空つ風しばし止まってまた歩く

雪降るや大粒小粒繰り返し

雪しまく目交ひの山ほぼ消して

踏み固め踏み固められ雪の道

雪折の枝先沢に触れてをり

松田裕子

しぐるるや一つの傘に二人の子

老猫の寝息確かめ冬の朝

白息の濃さを競ひて登校子

蠟涙を眺めて飽きず降誕祭

売出しの旗吹かれるる年の暮

夜回りの拍子木を聞く小晦日

夫と鐘撞いて帰りぬ大晦日

大ぶりの備前選びて福茶とす

茗菜籠抱いて仰げる朝日かな

薄雲の晴れて冬日の輝きぬ

村上理江

鶴渡る募金箱ある監視小屋

日差し受け出荷待つ日の冬林檎

立ち止まる人のありけり帰り花

星空に筵打ちせる寒夜かな

城跡に大火の跡や雪深し

注連飾付けたる車通り過ぐ

湯気の香のなつかしきかな蕎麥

ゆつたりとマフラー巻いて通勤す

紅白のワイン転がる女正月

バス通り抜けてひとりの冬木道

森口良樹

吾一人通るだけなり枯木道

凍星や雲のちぎれし端に見え

煮上がりし豆を配れる大晦日

切株を蹴つて御空へ初鵲

客帰り紅引くだけの三日かな

産土に七草を摘む母と子と

新聞取る三日続きの雪景色

子の指の間を零れ龍の玉

悴める手に綾取の赤き糸

山野ウタ

裏庭に八つ手の花の咲きにけり

寒夕焼飛行機雲が尾を引いて

小雪舞ふ石灯籠に鴉来る

車の上の雪を集めて雪だるま

父と子で作る四つの雪だるま

大寒の雨粒光る五景松

前庭の池に氷の張りにけり

大松の枝の氷柱に日の差せる

秋沙

景牡丹の大小生けて御堂かな

足すくむ凍結道の長きこと

寒紅をさして気持を整ふる

恒例の寒餅送る手配する

冬晴の畑のビニール光つて

坐禅草咲くを待つ氣の山掃除

紀英子

風や新作並ぶルイ・ヴィトン

サンタ帽かぶり互ひを笑ひ合う

夫の忌を目安にしての年用意

海鼠と酒それさへあればと子らの声

新雪にゆつくり足跡付けてゆく

風花や傍聴室の高き窓

高梨英子

初詣夫と柏手揃へたる

日の差せる垣根に鳴いて初雀

冬麗や弥山に映る雲の影

荒縄にてべらを吊るし冬旱

冬の旅ボウタン鮎を祖母の買ふ

熊谷ゆり子

山門の内外となく雪明り

元旦の箱より出せる赤絵皿

青三つ景輪に結びたる年の朝

ベトナムのビール並べて女正月

海老焼いて頭啜りぬ女正月

桑門わかこ

敬老日ビンゴゲームにはいビンゴ

山肌のパッチワークや冬紅葉

冬空にビルくつきりとバスを待つ

強弱を繰り返しては雪積る

事始バックで皺が薄くなり

須美れい

散歩道舞ひ降りて来る木の葉かな

母なれどクリスマスソングに胸踊る

クリスマスケーキを前に子に戻る

ぬくぬくと炬燵で雪を眺めをり

雪降つて紅き山茶花白になる

中野明美

去年今年川は海へと流れたる

初詣みくじ見せ合ふ家族の輪

菊五郎片肌脱いで初芝居

ゆつくりの足音聞こえ雪の朝

水仙の花重なりて揺れにけり

撫子

ビル見えてその上に富士初日影

新しき年の夜景を新宿で

大雪を喜んでゐる兄妹

青空に木の葉の氷柱光りけり

高嶋絹代

出窓から差し始めたる初日かな

薔薇の葉に朝日の差して年新た

元日の山水汲んで父戻る

雑煮餅競うて食ぶる孫の声

美耶

雪催仕事帰りのラーメン屋

冬の夜ひとりラーメン食べてをり

足元に初鳩来たる社かな

上島康子

鴨の群元安川に飛び来たり

雪舞うて一歩一歩と歩みたり

金川昭子

里帰り家族一緒の初詣

ラーメンのおまけに貰ふ寒卵

みさ子

ベトナム語背にして並ぶ初詣

洗濯機回して暮るる七日かな

やす保

朝起きて雪を踏みしめゴミ捨てに

阿波久

令和四年十二月度作品集より

あざみ 私の選んだ十句

大路終へ土地の新酒を買ひにけり	佐保光俊
葉飲む湯の沁み亘る霜夜かな	村上正人
鰯跳ねて跳ねては跳ねてまた跳ねて	高尾ひとみ
びしよ濡れのズック勤労感謝の日	亜矢
枇杷の花産着やさしき色多し	暁子
石を積む子の手の赤き冬の川	すみれ
立ち止まり初雪を見る小路かな	知佳子
母の畑葉物すべてに霜の降り	ちどり
リュック背に園児連なる蜜柑山	山野うた
凍星を数へて向かふ仕事かな	高梨英子

ちどり 私の選んだ十句

うすうすと雲流れゆく枯公孫樹	佐保光俊
飛んできて背を向けにけり尉鷄	高尾ひとみ
うたた寝を覚めれば窓に冬の月	あざみ
故郷よ山深く鹿鳴き合うて	大畑恵
枇杷の花産着やさしき色多し	暁子
山莊の温もれば飛ぶ冬の蠅	すみれ
一筋の滝の懸かりて初紅葉	秋沙
冬籠シャガールの絵の饒舌に	辻純江
寒月をかすめて夜間飛行かな	村上理江
凍星を数へて向かふ仕事かな	高梨英子